源氏物語

初音

紫式部
與謝野晶子訳

若やかにうぐひすぞ啼(な)く初春の衣(きぬ)くば
られし一人のやうに　（晶子）

新春第一日の空の完全にうららかな光のもとには、どんな家の庭にも雪間の草が緑のけはいを示すし、春らしい霞(かすみ)の中では、芽を含んだ木の枝が生気を見せて煙っているし、それに引かれて人の心ものびやかになっていく。まして玉を敷いたと言ってよい六条院の庭の初春のながめには格別なおもしろさがあった。常に増してみがき渡された各夫人たちの住居(すまい)を写すこと

に筆者は言葉の乏しさを感じる。春の女王（にょおう）の住居はとりわけすぐれていた。梅花の香（かおり）も御簾（みす）の中の薫物（たきもの）の香と紛らわしく漂っていて、現世の極楽がここであるような気がした。さすがにゆったりと住みなしているのであった。女房たちも若いきれいな人たちは姫君付きに分けられて、少しそれより年の多い者ばかりが紫の女王（にょおう）のそばにいた。上品な重味のあるふうをして、あちらこちらに一団を作っているこうした女房らは歯固（はがた）めの祝儀などを仲間どうしでしていた。鏡餅（かがみもち）なども取り寄せて、今年じゅうの幸福を祈るのに興じ合っている所へ主人（あるじ）の源氏がちょっと顔を見せた。

懐中手(ふところで)をしていた者が急に居ずまいを直したりしてきまりを悪がった。

「たいへんな御祝儀なのだね、皆それぞれ違ったことの上に祝福あれと祈っているのだろうね。少し私に内容を洩(も)らしてくれないか、私も祝詞を述べるよ」と微笑(ほほえ)んで言う源氏の美しい顔を見ることが今年(ことし)の春の最初の幸福であると人々は思っている。

中将の君が言う。

「御主人様がたを鏡のお餅にも祝っております。自身たちについての祈りなどをいたすものでございません」

朝の間は参賀の人が多くて騒がしく時がたったが、夕方前になって、源氏が他の夫人たちへ年始の挨拶(あいさつ)を言いに出かけようとして、念入りに身なりを整え化粧をしたのを見ることは実際これが幸福でなくて何であろうと思われた。

「今朝(けさ)皆が鏡餅の祝詞を言い合っているのを見てうらやましかった。奥さんには私が祝いを言ってあげよう」

　少し戯れも混ぜて源氏は夫人の幸福を祝った。

　　うす氷解けぬる池の鏡には世にたぐひなき影ぞ並

べる

これほど真実なことはない。二人は世に珍しい麗質の夫婦である。

曇りなき池の鏡によろづ代をすむべき影ぞしるく見えける

と夫人は言った。どの場合、何の言葉にもこの二人は長く変わらぬ愛を誓い合うのであった。

ちょうど元日が子（ね）の日にあたっていたのである。千

年の春を祝うのにふさわしい日である。姫君のいる座敷のほうへ行ってみると、童女や下仕えの女が前の山の小松を抜いて遊んでいた。そうした若い女たちは新春の喜びに満ち足らったふうであった。北の御殿からいろいろときれいな体裁に作られた菓子の髭籠（ひげかご）と、料理の破子（わりご）詰めなどがここへ贈られて来た。よい形をした五葉の枝に作り物の鶯（うぐいす）が止まらせてあって、それに手紙が付けられてある。

年月をまつに引かれて経（ふ）る人に今日（けふ）鶯の初音（はつね）聞かせよ

「音せぬ里の」（今日だにも初音聞かせよ鶯の音せぬ里は住むかひもなし）と書かれてあるのを読んで、源氏は身にしむように思った。正月ながらもこぼれてくる涙をどうしようもないふうであった。

「この返事は自分でなさい。きまりが悪いなどと気どっていてよい相手でない」

源氏はこう言いながら、硯（すずり）の世話などをやきながら姫君に書かせていた。かわいい姿で、毎日見ている人さえだれも見飽かぬ気のするこの人を、別れた日から今日まで見せてやっていないことは、真実の母親に

罪作りなことであると源氏は心苦しく思った。

引き分かれ年は経（ふ）れども鶯の巣立ちし松の根を忘れめや

少女の作でありのままに過ぎた歌である。

夏の夫人の住居（すまい）は時候違いのせいか非常に静かであった。わざと風流がった所もなく、品よく、貴女（きじょ）の家らしく住んでいた。源氏と夫人の二人の仲にはもう少しの隔てというものもなくなって、徹底した友情というものを持ち合っていた。現在では肉体の愛を超越

した夫婦であった。しかも精神的には永久に離れまいと誓い合う愛人どうしである。几帳（きちょう）を隔てて花散里（はなちるさと）はすわっていたが、源氏がそれを手で押しやると、また花散里はそうするままになっていた。お納戸色という物は人をはなやかに見せないものであるが、その上この人は髪のぐあいなどももう盛りを通り過ぎた人になっていた。優美な物ではないが添え毛でもすればよいかもしれぬ。

「私のような男でなかったら愛をさましてしまうかもしれない衰退期の顔を、化粧でどうしようともしないほど私の心が信じられているのがうれしい。あなたが

軽率な女で、ひがみを起こして別れて行っていたりしては、私にこの満足は与えてもらえなかったでしょう」
源氏は花散里に逢(あ)うごとによくこんなことを言った。永久に変わっていかない自身の愛と、この女の持つ信頼は理想的なものであるとさえ源氏は思っていた。親しい調子でしばらく話していたあとで、西の対のほうへ源氏は行った。
玉鬘(たまかずら)がここへ住んでまだ日の浅いにもかかわらず西の対の空気はしっくりと落ち着いたものになっていた。美しい童女によい好みの服装をさせたのや、若い女房などがおおぜいいて、室内の設備などはかなり行

き届いてできてはいるが、まだ十分にあるべき調度が調っているのではなくてもとにかく感じよく取りなされてあった。玉鬘自身もはなやかな麗人であると、見た目はすぐに感じるような、あのきわだった山吹の色の細長が似合う顔と源氏の見立てたとおりの派手な美人は、暗い陰影というものは、どこからも見いだせない輝かしい容姿を持っていた。苦労をしてきた間に少し少なくなった髪が、肩の下のほうでやや細くなりさらさらと分かれて着物の上にかかっているのも、かえってあざやかな清さの感ぜられることであった。今はこうして自分の庇護のもとに置くがあぶないことで

あったと以前のことを深く思う源氏は、この人を情人にまでせずにはおかれないのでなかろうか。肉親のようにまでなって暮らしていながらもまだ源氏は物足りない気のすることを、自身ながらも奇怪に思われて、表面にこの感情を現わすまいと抑制していた。

「私はもうずっと前からあなたがこの家の人であったような気がして満足していますが、あなたも遠慮などはしないで、私のいるほうなどにも出ていらっしゃい。琴を習い始めた女の子などもいますから、その稽古(けいこ)を見ておやりなさい。気を置かねばならぬような曲がった性格の人などはあちらにいませんよ。私の妻などが

そうですよ」

と源氏が言うと、

「仰せどおりにいたします」

と玉鬘（たまかずら）は言っていた。もっともなことである。

日の暮れ方に源氏は明石（あかし）の住居（すまい）へ行った。居間に近い渡殿（わたどの）の戸をあけた時から、もう御簾（みす）の中の薫香（たきもの）のにおいが立ち迷っていて、気高（けだか）い艶（えん）な世界へ踏み入る気がした。居間に明石の姿は見えなかった。どこへ行ったのかと源氏は見まわしているうちに硯（すずり）のあたりにいろいろな本などが出ているのに目がついた。支那（しな）の東京錦（とんきんにしき）の重々しい縁（ふち）を取った褥（しとね）の上には、よい琴が

出ていて、雅味のある火鉢（ひばち）に侍従香がくゆらしてある。その香の高い中へ、衣服にたきしめる衣被香（えびこう）も混じって薫（くゆ）るのが感じよく思われた。そのあたりへ散った紙に手習い風の無駄（むだ）書きのしてある字も特色のある上手（じょうず）な字である。くずした漢字をたくさんには混ぜずに感じよく書かれてあるのであった。姫君から来た鶯（うぐいす）の歌の返事に興奮して、身にしむ古歌などが幾つも書かれてある中に、自作もあった。

珍しや花のねぐらに木づたひて谷の古巣をとへる
鶯

やっと聞き得た鶯の声というように悲しんで書いた横にはまた「梅の花咲ける岡辺(をかべ)に家しあれば乏しくもあらず鶯の声」と書いて、みずから慰めても書かれてある。源氏はこの手習い紙をながめながら微笑(ほほえ)んでいた。書いた人はきまりの悪い話である。筆に墨をつけて、源氏もその横へ何かを書きすさんでいる時に明石は膝行(いざ)り出た。思い上がった女性ではあるが、さすがに源氏に主君としての礼を取る態度が謙遜(けんそん)であった。この聡明(そうめい)さは明石の魅力でもあった。白い服へ鮮明に掛かった黒髪の裾(すそ)が少し薄くなって、きれいに分かれ

た筋を作っているのもかえってなまめかしい。源氏は紫夫人を腹だたせることになるかもしれぬと思いながら、そのまま寝てしまった。六条院の他の夫人の所ではこの現象は明石夫人がいかに深く愛されているかを思わせるものであると言っていた。まして南の御殿の人々はくやしがった。

源氏はまだようやく曙（あけぼの）ぐらいの時刻に南御殿へ帰った。こんなに早く出て行かないでもいいはずであるのにと、明石はそのあとでやはり物思わしい気がした。紫の女王はまして、失敬なことであると、不快に

思っているはずの心がらを察して、
「ちょっとうたた寝をして、若い者のようによく寝入ってしまった私を、迎えにもよこしてくれませんでしたね」
　こんなふうにも言って機嫌を取っているのもおもしろく思われた。打ち解けた返辞のしてもらえない源氏は困ったままで、そのまま寝入ったふうを作ったが、朝はずっと遅くなって起きた。正月の二日は臨時の饗宴を催すことになっていたために、忙しいふうをして源氏はきまり悪さを紛らせていた。親王がたも高官たちもほとんど皆六条院の新年宴会に出席した。音

楽の遊びがあって贈り物に纏頭(てんとう)に六条院にのみよくする華奢(かしゃ)が見えた。多数の縉紳(しんしん)は皆きらびやかに風采(ふうさい)を作っているが、源氏に準じて見えるほどの人もないのであった。個別的に見ればりっぱな人の多い時ではあるが、源氏の前では光彩を失ってしまうのが気の毒である。つまらぬ下僕(しもべ)なども主人に従って六条院へ来る時には、服装も身の取りなしをも晴れがましく思うのであったから、まして年若な高官たちは妙齢の姫君が新たに加わった六条院の参座には夢中になるほど容姿を気にして来て、平年と違った光景が現出された新春であった。春の花を誘う夕風がのどかに吹いていた。

前の庭の梅が少し咲きそめたこの黄昏時(たそがれ)に、楽音がおもしろく起こって来た。「この殿」が最初に歌われて、はなやかな気分がまず作られたのである。源氏も時々声を添えた。福草(さきぐさ)の三つ葉四つ葉にというあたりがことにおもしろく聞かれた。どんなことにも源氏の片影が加わればそのものが光づけられるのである。こうしたはなやかな遊びも派手(はで)な人出入りの物音も遠く離れた所で聞いている紫の女王(にょおう)以外の夫人たちは、極楽世界に生まれても下品下生(げぼんげしょう)の仏で、まだ開かない蓮(はす)の蕾(つぼみ)の中にこもっている気がされた。まして離れた東の院にいる人たちは、年月に添えて退屈さと寂しさが

加わるのであるが、うるさい世の中と隔離した山里に住んでいる気になっていて、源氏の冷淡さをとがめたり恨んだりする気にもなれなかった。物質的の心配はいっさいなかったから、仏勤めをする人は専念に信仰の道に進めるし、文学好きな人はまたその勉強がよくできた。住居（すまい）なども個人個人の趣味と生活にかなった様式に作られてあった。

新年騒ぎの少し静まったころになって源氏は東の院へ来た。末摘花（すえつむはな）の女王（にょおう）は無視しがたい身分を思って、形式的には非常に尊貴な夫人としてよく取り扱っているのである。昔たくさんあった髪も、年々に少なく

なって、しかも今は白い筋の多く混じったこの人を、面と向かって見ることが堪えられず気の毒で、源氏はそれをしなかった。柳の色は女が着て感じのよいものでないと思われたが、それはここだけのことで、着手が悪いからである。陰気な黒ずんだ赤の搔練（かいねり）の糊気（のりけ）の強い一かさねの上に、贈られた柳の織物の小袿（こうちぎ）を着ているのが寒そうで気の毒であった。重ねに仕立てさせる服地も贈られたのであるがどうしたのであろう。鼻の色だけは春の霞（かすみ）にもこれは紛れてしまわないだろうと思われるほどの赤いのを見て、源氏は思わず歎息（たんそく）をした。手はわざわざ几帳（きちょう）の切れを丁寧に重ね直した。

かえって末摘花は恥ずかしがっていないのである。こうして変わらぬ愛をかける源氏に真心から信頼している様子に同情がされた。こんなことにも常識の不足した点のあるのを、哀れな人であると源氏は思って、自分だけでもこの人を愛してやらねばというふうに考えるところに源氏の善良さがうかがえるのである。話す声なども寒そうに慄(ふる)えていた。

　源氏は見かねて言った。

「あなたの着物のことなどをお世話する者がありますか。こんなふうに気楽に暮らしていてよい人というものは、外見はどうでも、何枚でも着物を着重ねている

のがいいのですよ。表面だけの体裁よさを作っているのはつまりませんよ」
女王はさすがにおかしそうに笑った。
「醍醐(だいご)の阿闍梨(あじゃり)さんの世話に手がかかりましてね、仕立て物が間に合いませんでした上に、毛皮なども借りられてしまいまして寒いのですよ」
と説明する阿闍梨というのは鼻の非常に赤い兄の僧のことである。あまりに見栄を知らない女であると思いながらも、ここではまじめな一面だけを見せている源氏はなおも注意をする。
「毛皮はお坊様にあげたほうが適当でいいのですよ、

そんな物より、白い着物という物は何枚でも重ねて着ていいのですからね。なぜあなたはそうしないのですか。入り用な物も送ってよこすのを私が忘れていれば、遠慮なく言ってよこしてください。もとからぼんやりとした私はまた怠け者でもあるし、ほかの方たちのこととこんがらがってしまうこともあって、済まない結果にもなるのですよ」

と言って源氏は、隣の二条院のほうの蔵をあけさせ、絹や綾を多く紅の女王に贈った。荒れた所もないが、男主人の平生住んでいない家は、どことなく寂しい空気のたまっている気がした。前の庭の木立ちだけは春

らしく見えて、咲いた紅梅なども賞翫(しょうがん)する人のないのをながめて、

ふるさとの春の木末にたづねきて世の常ならぬ花を見るかな

と源氏は独言(ひとりごと)したが、鼻の赤い夫人は何のこととも気づかなかったであろう。

空蟬(うつせみ)の尼君の住んでいる所へ源氏は来た。そこの主人(あるじ)らしくここは住まずに、目だたぬ一室にいて、住居(すまい)の大部分を仏間に取った空蟬が仏勤めに傾倒して

暮らす様子も哀れに見えた。経巻の作りよう、仏像の飾り、ちょっとした閼伽(あか)の器具などにも空蟬のよい趣味が見えてなつかしかった。青鈍(あおにび)色の几帳(きちょう)の感じのよい蔭(かげ)にすわっている尼君の袖口(そでぐち)の色だけにはほかの淡い色彩も混じっていた。源氏は涙ぐんでいた。

「松が浦島(うらしま)（松が浦島今日(けふ)ぞ見るうべ心あるあまも住みけり）だと思って神聖視するのにとどめておかねばならないあなたなのですね。昔から何という悲しい二人でしょう。しかしこうして逢(あ)ってお話しするくらいのことは永久にできるだけの因縁があるのですね」

などと言った。空蟬の尼君も物哀れな様子で、

「ただ今こんなふうに御信頼して暮らさせていただきますことで、私は前生に御縁の深かったことを思っております」

と言う。

「あなたを虐(しいた)げた過去の追憶に苦しんで、おりおり今でも仏にお詫(わ)びを言わねばならないのが私です。しかしおわかりになりましたか、ほかの男は私のように純なものではないということを、あなたはそれからの経験でお知りになっただろうと思う」

継息子(ままむすこ)のよこしまな恋に苦しめられたことを、源氏は聞いていたのであろうと女は恥ずかしく思った。

「こんなにみじめになりました晩年をお見せしておりますことでだれの過去の罪も清算されるはずでございます。これ以上の報いがどこにございましょう」

と言って、空蟬は泣いてしまった。昔よりも深味のできた品のよい所が見え、過去の恋人で現在の尼君として別世界のものに扱うだけでは満足のできかねる気も源氏はしたが、恋の戯れを言いかけうる相手ではなかった。いろいろな話をしながらも、せめてこれだけの頭のよさがあの人にあればよいのにと末摘花の住居のほうがながめられた。こんなふうで源氏の保護を受けている女は多かった。だれの所も洩らさず訪問して、

「長く来られない時もありますが、心のうちでは忘れているのではないのです。ただ生死の別れだけが私たちを引き離すものだと思いますが、その命というものを考えると、実に心細くなりますよ」

などとなつかしい調子で恋人たちを慰めていた。皆ほどほどに源氏は愛していた。女に対して驕慢（きょうまん）な心にもついなりそうな境遇にいる源氏ではあるが、末々の恋人にまで誠意を忘れず持ってくれることに、それらの人々は慰められて年月を送っていた。

今年（ことし）の正月には男踏歌（おとこどうか）があった。御所からすぐに朱雀（すざく）院へ行ってその次に六条院へ舞い手はまわって来

た。道のりが遠くてそれは夜の明け方になった。月が明るくさして薄雪の積んだ六条院の美しい庭で行なわれる踏歌がおもしろかった。舞や音楽の上手（じょうず）な若い役人の多いころで、笛なども巧みに吹かれた。ことにここでのできばえを皆晴れがましく思っているのである。他の二夫人らにも来て見物することを源氏が勧めてあったので、南の御殿の左右の対や渡殿（わたどの）を席に借りて皆来ていた。東の住居（すまい）の西の対の玉鬘（たまかずら）の姫君は南の寝殿に来て、こちらの姫君に面会した。紫夫人も同じ所にいて几帳（きちょう）だけを隔てて玉鬘と話した。踏歌の組は朱雀院（すざく）で皇太后の宮のほうへ行っても一回舞って来た

のであったから、時間がおそくなり、夜も明けてゆくので、饗応（きょうおう）などは簡単に済ますのではないかと思っていたが、普通以上の歓待を六条院では受けることになった。光の強い一月の暁の月夜に雪は次第に降り積んでいった。松風が高い所から吹きおろしてきてすさまじい感じにももう一歩でなりそうな庭にもう折り目もなくなった青色の上着に白襲（しろがさね）を下にしただけの服装に、見ばえのない綿を頭にかぶっている舞い手が出ているだけのことも、所がらかおもしろくて、命も延びるほどに観衆は思った。源氏の子息の中将と内大臣の公子たちが舞い手の中ではことにはなやかに見えた。

ほのぼのと東の空が白んでゆく光に、やや大降りに降る雪の影が見えて寒い中で、「竹川」を歌って、右に寄り、左に集まって行く舞い手の姿、若々しいその歌声などは、絵にかいて残すことのできないのが遺憾である。各夫人の見物席には、いずれ劣らぬ美しい色を重ねた女房の袖口（そでぐち）が出ていて、曙（あけぼの）の空に春の花の錦（にしき）を霞（かすみ）が長く一段だけ見せているようで、これがまた見ものであった。舞い人は、「高巾子（こうこじ）」という脱俗的な曲を演じたり、自由な寿詞（じゅし）に滑稽味（こっけいみ）を取り混ぜたりもして、音楽、舞曲としてはたいして価値のないことで役を済ませて、慣例の纏頭（てんとう）である綿を一袋ずつ頭にい

ただいて帰った。夜がすっかり明けたので、二夫人らは南御殿を去った。源氏はそれからしばらく寝て八時ごろに起きた。

「中将の声は弁（べん）の少将の美音にもあまり劣らなかったようだ、今は不思議に優秀な若者の多い時代なのですね。昔は学問その他の堅実な方面にすぐれた人が多かったろうが、芸術的のことでは近代の人の敵ではないらしく思われる。私は中将などをまじめな役人に仕上げようとする教育方針を取っていて、私自身のまじめでありえなかった名誉を回復させたく思っていたが、やはりそれだけでは完全な人間に成りえないのだから、

芸術的な所をなくさせぬようにしなければならないのだと知った。どんな欲望も抑制したまじめ顔がその人の全部であってはいやなものですよ」

などと源氏は夫人に言って、息子をかわいく思うふうが見えた。万春楽(ばんしゅんがく)を口ずさみにしていた源氏は、

「奥さんがたがはじめてこちらへ来た記念に、もう一度集まってもらって、音楽の合奏をして遊びたい気がする。私の家(うち)だけの後宴(ごえん)があるべきだ」

と言って、秘蔵の楽器をそれぞれ袋から出して塵(ちり)を払わせたり、ゆるんだ絃(げん)を締めさせたりなどしていた。夫人たちはそのことをどんなに晴れがましく思ったこ

とであろう。

底本：「全訳源氏物語　中巻」角川文庫、角川書店
　　　１９７１（昭和46）年11月30日改版初版発行
　　　１９９４（平成６）年６月15日39版発行
※このファイルは、古典総合研究所（http://www.genji.co.jp/）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。
※校正には、２００２（平成14）年１月15日44版を使用しました。
入力：上田英代
校正：kumi
２００３年5月22日作成